

●二人で味わう古典和歌(106)

武蔵野むさしのに占部うらへかた焼きまささでにも告のらぬ君が名占うらに出にけり

東歌

『万葉集』巻十四、武蔵の国の相聞歌九首のうち二首目の作。「武蔵野で占い師が鹿の肩骨を焼いて占いしても、はつきりとお告げなどなかった君の名なのに、その名があんな占いに顕れてしまった」。「あんな占い」とは、作者である女の母親による占いのことだという。母親は専門の占い師などではなく、あくまで私的な、いわば趣味の占いによつて娘の秘かな思いの相手の名前を言い当てたことになる。娘の立場からすれば、「あんな(素人のちやちな)占いなのに……」という動揺と反発の入り混じる感想に当然なるだろう。

そもそも古代の占いには職業的で公的な占いと、習俗的で私的な占いの二つがあった。「武蔵野」の「占部」による「かた焼き」が前者で、母親による「占」が後者。掲出歌では鹿の肩骨と訳されているが、ほかに亀甲を焼いてひ

び割れた形で占う方法などもあつたようだ。もちろん前者の結果の方が後者よりも重みを持つていた。しかし、当時の人々にとつて占いは現代よりもずっと信憑性のある重要なものだったはずである。専門家による占いでも出ることのなかつた名は、誰にも漏らしたことのないよほど内密な相手だったと想像される。

そんな相手をなぜ母親は知ることができたのか。おそらく名を知つたのは占いではなく、別の情報網によるものだろう。ストレートに聞けばたぶん娘は本当のところを教えたくない。でも心配でどうにかして確かめたい。娘を問い立てるために占いを利用しようと考えたのだとしたら、なんておもしろい母親なのだと思う。巻十一に「百積ももあの船か隠り入る八占やうさし母は問ふともその名は告らじ」という作がある。初句二句は「浦」と「占」を掛けた「八占(たぐさんの占い)」を導く序詞。ここでも母親がさまざま占いによつて手を替え品を替え娘の相手の名前を聞きだそうとがんばっている。対して娘は「その名は告らじ」ときつぱり断っている。

(小島なお)

